Boston Scientific

福島県立会津総合病院 消化器内科／小腸・大腸・肛門科

【住　所】福島県会津若松市城前 10 番 75 号　【病院長】鈴木 啓二 先生　【病床数】309 床

地域医療の完成形「福島モデル」創生を目指し 会津医療センター開設準備を遂行

2013年春 地域医療の完成形を目指した 福島県立医科大学会津医療センター（仮称）が開設

福島県立会津総合病院は、福島県立喜多方病院と統合の上、公立大学法人福島県立医科大学の附属病院である会津医療センター（仮称）として2013年春に新しく生まれ変わります。中核都市と広い周辺エリアで構成される複数の医療圏を抱える福島県には、大都市中心に設計された医療政策ではカバーしきれない多くの問題があります。これらの問題点を解決する地域医療の「福島モデル」創生が望まれており、同センターにはこの目的を果たす重要な働きをする施設として大きな期待が寄せられています。

同センターは血液内科や漢方内科など新たな診療科を設置して診療機能を強化するとともに、福島県立医科大学直属の組織として教育研究機能も備えた施設となります。また、コンピューター理工学部を有する会津大学とも連携して幅広い分野での研究も期待されています。現在は8名の医師（血液内科、消化器内科、小腸·大腸·肛門科、糖尿病·代謝·腎臓内科、漢方内科、外科、整形外科、耳鼻咽喉科）が福島県立医科大学会津医療センター準備室教授として着任し、同院で通常の診療に従事しながら開設準備に当たっています。

今回、2010年4月に着任された入澤篤志先生と、同年9月に着任された冨樫一智先生に、準備室の役割や同センター開設に向けた取り組みなどについてお話を伺いました。

福島医大会津医療センター準備室
（消化器内科）教授
福島県立会津総合病院　院長補佐
入澤 篤志 先生

福島医大会津医療センター準備室
（小腸・大腸・肛門科）教授
福島県立会津総合病院　院長補佐
冨樫 一智 先生

最先端の内視鏡診療に触れ スタッフの意欲やスキルが急速に向上

入澤先生と冨樫先生が準備室に着任して診療を開始されて以降、県立会津総合病院で行われる内視鏡検査や治療の幅が大きく広がりました。入澤先生は胆膵疾患の診療や超音波内視鏡を用いた診療がご専門であり、さらに膵癌や消化管粘膜下腫瘍の診断に有効な「超音波内視鏡下穿刺生検」のご経験も豊富なため、全国でも最先端の検査や治療を地域の患者様に提供できるようになりました。また、小腸、大腸、肛門分野がご専門の冨樫先生は、ダブルバルーン内視鏡を用いた小腸や大腸疾患の診断治療を始められています。大腸検査は安全性を考慮して全例CO_2送気で施行しているので、患者様の評判も高いそうです。入澤先生は、「大都市圏の医療機関と変わらない最新の治療を提供できる器材の準備は既に整いました。今は最新の手技や機器類の使い方をスタッフに教育しながら最先端の診療を行っています」と言われます。冨樫先生は、「スタッフは皆意欲的で、新しい知識や技術をどんどん吸収しています。日々その成長を実感していますね」と感想を述べられました。

さらに、2011年5月から、澁川悟朗先生が会津医療センター準備室講師として消化器内科に着任されました。医師不足が全国的に問題となっている中、同院は徐々に医療スタッフの充実が図られており、今後の発展が期待されます。

スタッフ側でリーダーシップを発揮されている、都倉美津子主任にもお話を伺いました。「入澤先生と冨樫先生がいらっしゃってから、新しい治療の知識や技術を習得しようというスタッフのモチベーションが明らかに高まりました。昨年は月に2回程度自主的に勉強会を開催し、先生方から手技に関する指導を仰いだり、メーカーの担当者を招いて処置具の使い方を講習してもらったりしました」とおっしゃっています。現在では毎週医師と看護師の合同カンファレンスを行い、治療の方針や手技の方法、準備物品などの情報共有をされているとのことです。都倉主任は、「新しい知識や技術を習得することで、検査や治療の安全性や感染管理の意識もさらに高

▶ページへつづく

福島県立会津総合病院 消化器内科／小腸・大腸・肛門科

まりました。そのため、ディスポーザブルの内視鏡処置具の導入も積極的に進めています」とお話になりました。

福島医大会津医療センター
準備室（消化器内科）講師
澁川 悟朗 先生

内視鏡室スタッフ
写真左：都倉 美津子 主任
写真右：押部 一江 主任

将来活躍する優れた人材育成のため 経験豊富な教授によるマンツーマン指導

県立会津総合病院では、入澤先生や富樫先生のような経験豊富な医師から直接指導を受けられるため、若手医師や研修医にとっては貴重な教育の場にもなっています。現在、消化器内科には2名の後期研修医（阿部洋子先生、二階堂暁子先生）が勤務されており、充実した研修をされています。ERCP関連手技やEUS-FNAなどの最先端の内視鏡診療も教授からの直接指導で深く学ばれています。一方、初期研修医の先生も同院における指導体制の良さを実感しています。昨年まで同院に初期研修医として勤務されていた根本大樹先生は、現在でも週に1日非常勤医師として勤務されています。根本先生は、「何と言っても実際に多くの症例を経験できること、さらに教授からマンツーマンで指導を受けられることが最大の魅力です。これは他の施設ではまずあり得ない指導体制でしょう」とおっしゃいます。根本先生の実弟で現在初期研修医1年目の根本鉄太郎先生も同院で研修を受けていますが、「兄の強い推薦があってこの施設での研修を選びました。教授は時間の許す限りご自分が学会発表等で使用された資料を使って講義をしてくださいますし、臨床研修では勉強した知識を使ってまず自分の頭で考え、実践してみる機会を与えてくださいます。先生方はすぐそばで見守り、必要に応じて修正していただけるので、安心して自分の経験を積める研修環境だと思います」と研修の様子をお話いただきました。

県立会津総合病院
非常勤医（後期研修医）
根本 大樹 先生

県立会津総合病院
初期研修医
根本 鉄太郎 先生

分野横断的な交流や他大学との連携で 世界へ発信する新しいアイデアの醸成を

先生方はこのような通常の診療と平行して準備室業務も進められていますが、そこでの仕事は会津医療センターの設備面と人材面の充実を図るためのプラン策定とその実施が主な内容です。同院は現在の「診療」を中心とした一般病院から、新たに「教育」と「研究」を加えた3つの柱をもつ大学附属施設へと変化します。入澤先生は、「交通の便が良いとは言えない会津で地域完結型の医療を目指すのはもちろんですが、常に新しい情報を発信し、地域の外へも影響力を持つ施設を目指しています。新センターは研究組織としての講座は消化器内科学講座や小腸·大腸·肛門病学講座を含む11講座、病床数230程度で23診療科での開設が予定されておりますが、他の大学と比べると規模が大きいとは言えないでしょう。しかし、コンパクトな組織である利点として、講座間の横のつながりを強くすることができると思います。そして、複数の講座間の分野横断的な交流によって、既存の講座にはない全く新しい発想が生まれるのではないかと期待しています。また、小惑星探査機「はやぶさ」のプロジェクトにも参画した会津大学との共同研究も新しい取り組みです。古くは野口英世を輩出したように、会津には世界で活躍する人材を輩出する風土があります。この新しい取り組みは、教育·研究施設である大学病院の可能性をさらに広げる一石となるのではないかと思います」と、新センターへの展望を語っていただきました。

会津医療センター完成予想図

内視鏡室のみなさん

© 2011 Boston Scientific Corporation or its affiliates. All rights reserved.